

中国語訳「忠臣蔵」の諸相

— 『海外奇談』の翻訳者像と翻訳態度初探—

奥村佳代子

Aspects of the Chinese-language translation of Chushingura (The Treasury of Loyal Retainers):

Profiling the translator of Haiwai Qitan (Tales of the Strange)
and examining his translation style

OKUMURA Kayoko

There are two types of Chinese-language translations of the Japanese joruri (narrative drama) work “Kanadehon Chushingura” (The Treasury of Loyal Retainers: A Model for Emulation). “Chushingura Engi” (An Adaptation of The Treasury of Loyal Retainers) is a work translated by Nagasaki To Tsuji (Japanese interpreters of Chinese located in Nagasaki), and “Haiwai Qitan” (Tales of the Strange, a colloquial Chinese-language translation of Chushingura) is a work completed by a Japanese intellectual. Both works were translated in the Edo Period.

“Haiwai Qitan” (Tales of the Strange) was long ignored as a Chinese language source, but comparing it with “Chushingura Engi” (An Adaptation of The Treasury of Loyal Retainers) revealed that it depicts the results of a Japanese intellectual learning a foreign language, i.e. Chinese.

This paper begins by looking at the heterogeneity of vocabulary found in “Chushingura Engi” (An Adaptation of The Treasury of Loyal Retainers) and the diverse vocabulary found in “Haiwai Qitan” (Tales of the Strange). It then examines how “Chushingura Engi” (An Adaptation of The Treasury of Loyal Retainers) is reworked in “Haiwai Qitan” (Tales of the Strange). Finally, the paper profiles the translator of “Haiwai Qitan” (Tales of the Strange) and discusses his translation style.

1. はじめに

『仮名手本忠臣蔵』は、元禄14年（1701）3月14日に江戸城内で起きた浅野内匠頭による吉良上野介に対する刃傷事件から、元禄15年に浅野の家臣が主君の仇を討って吉良上野介を殺害し、元禄16年にその家臣達が切腹を命じられるまでを題材とした浄瑠璃作品である。いわゆる赤穂義士を題材とした作品は数多いが、とりわけ『仮名手本忠臣蔵』は、先行作品の優れた見せ場や趣向を取り入れて完成された、「義士劇の集大成」と見なされる作品である。

『仮名手本忠臣蔵』が完成し、浄瑠璃で初演されたのは寛延元年（1748）8月14日のことであった。その約65年後に、『海外奇談』が出版された。『海外奇談』は、『仮名手本忠臣蔵』を中国白話小説風に訳した作品である。本書が出版に至るまでの経緯は、不明な点が多いのだが、筆者は先に、この本を完成させた人物は日本人であること、また、訳者として記されている清人の「鴻濛陳人」という人物が、序文を書いた亀田鵬斎ではないということ指摘し、断片的ではあるけれども、『海外奇談』が完成するに至る経緯を考察し、『海外奇談』が個人の手による作品ではなく、日本人と中国人が互いに異文化に対して興味を抱いたことによって、生み出された作品ではないだろうか、と推測した¹⁾。その根拠は、同じく『仮名手本忠臣蔵』を中国語に訳した『忠臣蔵演義』の存在である。『忠臣蔵演義』は、写本資料であり、表紙に記された訳者名から、訳された大まかな年代を推定することは可能であるが、何年であると断定することは難しい。ただ、『海外奇談』との相違点から見て、『海外奇談』より先に『忠臣蔵演義』が訳されており、『海外奇談』は『忠臣蔵演義』を元に作られた本であると考えられる。

元々訳されていた『忠臣蔵演義』があったにもかかわらず、実際に出版されたのは『海外奇談』であった。『海外奇談』は、明治時代に至るまで何度も版を重ねており、『仮名手本忠臣蔵』の中国語訳作品として定着していたと言えるだろう。『忠臣蔵演義』と『海外奇談』とは、一見しただけでは共通点が見出せないほど、異なった様相をしている。『仮名手本忠臣蔵』の中国語訳として出版するには、『忠臣蔵演義』ではなく、『海外奇談』である必要があったのだとすれば、その理由を『忠臣蔵演義』と『海外奇談』の様相の違いに求められると考えられるだろう。

本稿では、原文にあたる『仮名手本忠臣蔵』と照らし合わせつつ、『忠臣蔵演義』との比較における『海外奇談』の特徴について見ていきたい。

1) 奥村佳代子 2010「亀田鵬斎と『海外奇談』」。関西大学アジア文化交流研究センター紀要『アジア文化交流研究』第5号（2010年2月）p. 201～215所収。

2. 語彙における不均質と多様性

唐通事の唐話課本は、唐通事としての会話力の養成を目的としているため、一般に代詞や語気助詞などの語彙の使用が均質である。たとえば、『訳家必備』や『唐通事心得』は、それぞれ唐通事の仕事内容や心構えを題材としたテキストであるが、代詞あるいは自称や他称として用いられる語はほぼ決まったものが用いられ、語気助詞の使用は多くないうえに限られている。

『忠臣蔵演義』も、表に示すように、語彙の種類が豊富であるとは言えないが、唐通事養成のためのテキストに見られる均質性とは、また違った側面を指摘することができる。

(1) 表『忠臣蔵演義』の人称代詞および自称と他称

	単 数	複 数
一人称	我 奴 妾	我們 我等
二人称	你 汝	你們 你等 汝等
三人称	他 渠	他們

会話テキストの『訳家必備』（本論では、『唐話辞書類集』第20集所収のテキストを使用する。）を例にとると、一人称単数は「我」である。「奴」と「妾」は、『仮名手本忠臣蔵』という文学作品中の、若い女性が自称として使用する語として相応しい訳語であると考えられ、用いられたのだろう。

また、一か所のみ三人称単数として「渠」という語が用いられているが、『訳家必備』ではすべて「他」が用いられている。

(2) 表『忠臣蔵演義』の場所を指し示す指示代詞

近 称	遠 称
這裡 這里 此 此間	那裡 那里 彼

表に挙げた語は、いずれも地の文、会話文ともに用いられているが、『訳家必備』の会話文では、近称は「這裡」、遠称は「那裡」「那里」「彼」であるのに対して、『忠臣蔵演義』はやや均質性を欠いている。『忠臣蔵演義』で、「此」「此間」が用いられている場面を見てみよう。

托那設道。這裡就是大星由良公の府上是麼。若在此居住。替我說。加古川本藏的老婆托那設。自從本郷搬房之後。絶無活息。務要相見。遠遠地尋到此間。(戸無瀬は言った。「こち

らは大星由良公のお屋敷でございますか。もしここにお住いなら、お伝えください。加古川本蔵の妻の戸無瀬でございます。本郷から引っ越して以来、まったくご無沙汰をいたしておりました。ぜひお会いいたしたく、はるばるこちらまでお訪ねして参りました。』)

これは、戸無瀬という女性の科白であるが、この一回の科白の中で「ここ」を表す語として「這裡」「此」「此間」の三語を用いている。「這裡」は白話、「此」「此間」は文言に分類することが可能であるが、このような文白混淆は白話小説にも多く見られる。『忠臣蔵演義』が、実際の会話を学ぶためのテキストではなく文学作品の翻訳であるがゆえの不均質であると言えるだろう。

同様の指摘は、語気助詞にも当てはまる。『忠臣蔵演義』の語気助詞の使用例は次のとおりである。なお、()内の訳は筆者による現代語訳である。

(3) 表『忠臣蔵演義』の語気助詞

了	不好了。禍事來哩。(まずい。禍が降りかかってきた。)
呢	不是同來玩耍呢。(一緒に遊びに来たのではないのだ。)
哩	不好了。禍事來哩。(まずい。禍が降りかかってきた。)
罷	便要放他去罷。(彼を放してやれ。)
麼	沒事回來了麼。(無事に帰ってきましたか。)
呀	莫不是妹子呀。(妹ではあるまいか。)
也	你們看看那樣整頓花枝也。(あれほどに整った花枝をご覧なさい。)
矣	天將亮矣。(もうすぐ夜が明けるだろう。)
耶	你們豈不是要報亡君的冤讎耶。(亡き主君の復讐を遂げたいのではないのか。)
哉	善哉善哉。(それは良い、それは良い。)
乎	死得個不亦樂乎。(いっそ死んでしまったほうが楽じゃ。)
耳	妾是被勸醉。不過只得由風吹醒耳。(あたいは酒を勧められて酔っ払ったから、風に当たって醒まそうとしているだけさ。)

白話の「了」「呢」「哩」「罷」「麼」「呀」も、文言の「也」「矣」「耶」「哉」「乎」「耳」もともに用いられている。

言葉の均質性あるいは不均質性が顕著に現れる代詞や語気助詞から見ると、『忠臣蔵演義』は文学の翻訳作品という性質上、唐通事の会話テキストに比べるとやや不均質であると言えるだ

ろう。

次に、『海外奇談』の中国語（唐話）について、同様に表に示して見てみよう。

(4) 表『海外奇談』の人称代詞および自称と他称

	単 数	複 数
一人称	我 俺 儂 奴 奴家	我們 我等 俺們
二人称	你 汝	你們 你等
三人称	他 渠	他們

(5) 表『海外奇談』の場所を指し示す指示代詞

近 称	遠 称
這裡 這里 這邊 這間 此	那裡 那里 那邊 彼

(6) 表『海外奇談』の語気助詞

了	差了。(しまった。)
呢	要做恁地呢。(どうしようというのか。)
哩	添上一頂愁帽兒來哩。(気懸りがひとつ増えた。)
罷	將包容放他去罷。(彼を許して放してやれ。)
麼	你們怎不是要報亡君的冤讎麼。(亡き主君の復讐を遂げたいのではないのか。)
呀	莫不是危險了呀。(危険ではありませんか。)
也	苦也。(苦しい。)
乎	死箇不亦說乎。(いっそ死んだほうが楽じゃ。)
唷	愛唷。(あら、まあ。)
呵	阿呵。(ああ。)
唬	耶唬。(いや。)
嚮	我那老人家如何嚮。至今不回來。(うちのおじいさんはどうしたのだろう。まだ帰って来ないなんて。)

(4)から(6)の表に示したように、『海外奇談』は『忠臣蔵演義』よりさらに語彙が多い。しかも、『忠臣蔵演義』が文白混淆であるのに対して、『海外奇談』はより白話に偏っており、さまざまな白話語彙を多用している。『海外奇談』の言葉は、不均質であるとともに、多様であると

も言えるだろう。

『海外奇談』の言葉の多様性は、『忠臣蔵演義』を元書き換えと新たな語句の付け足しを行ったことにより生じたと言えようが、この書き換えには何らかの基準があるのだろうか。代詞と語気助詞を見た限りでは、白話の語彙を多く用いるという態度が垣間見える。次に、さらにいくつかの具体的な語句を比較し、『海外奇談』の翻訳者像と翻訳態度に迫ってみたい。

3. 『海外奇談』の翻訳者像

『忠臣蔵演義』から『海外奇談』への書き換えには、書き換えられる前と後の語の意味用法が相似しており、なぜ書き換えたのかが分からないものがある。たとえば、目的を示す介詞の「與」と「為」を見てみよう。上段が『忠臣蔵演義』、下段が『海外奇談』からの引用である。

1

只爲他女婿賣了女兒。

只與他女婿賣了女兒。

2

不等他老翁回來。爲甚不交老婆出去。

不等他老翁回來時。與甚不交女兒出去。

3

不料你与他丈人報讎。

不料你爲他岳父報讎。

4

活佳兒道。雖是相別。只爲他丈夫賣与我煙花。並沒一分傷心。倒指望而去。

活佳兒道。雖是訣別。爲丈夫賣與煙花。並沒一分歎悲。倒歡心而去。

「為」も「與」もともに目的を導くための介詞であり、明代以前においては「給」はほとんど使われず、多くは「與」を用いた²⁾。『忠臣蔵演義』においても『海外奇談』においても、「爲」と「與」のいずれも用いられている。上に引用した1と2は、『忠臣蔵演義』では「爲」が用いられているが、『海外奇談』では「與」に書き換えられている例である。ただし、『忠臣蔵演義』の「爲」を『海外奇談』ではすべて「與」に書き換えているかといえばそうではなく、逆に、3に挙げたように、『忠臣蔵演義』で目的を導くために用いられた「与」が『海外奇談』では「爲」に変

2) 太田辰夫著『中国語歴史文法』(1958年、江南書院)1981年に朋友書店から再発行されたものを参照した。

えられている例や、4のように書き換えを行わず、『忠臣蔵演義』の「爲」を『海外奇談』でもそのまま踏襲している例もある。

『忠臣蔵演義』と『海外奇談』における「爲」と「與」の使用状況を見れば、『忠臣蔵演義』では「爲」の使用がより多く、『海外奇談』では「與」の使用がより多い。両者を比較することによって見えてくることは、2点あるだろう。つまり、『忠臣蔵演義』をもとに『海外奇談』として訳しなおす際に、語句を機械的に書き換えているわけではなさそうだとということと、『海外奇談』の翻訳者に「爲」と「與」は互換可能であるという認識があったということである。

機械的に書き換えてはいないということと、「爲」と「與」の意味用法に対する理解があったということは、『海外奇談』の翻訳者には中国語（唐話）に対する知識があったということを示しているといえるだろう。このように類推する根拠は、「把」に対する翻訳態度の現われにも求めることができる。

「把」には、介詞として処置あるいは材料や用具、手段を導く用法と「取る」という動詞としての用法とがある。より古い動詞としての用法は、早くから日本人の漢文の知識の中にあったと考えられる。また、材料や用具、手段を導く介詞としての用法も、「～をとって」「～をもって」という意味の助詞に当たる語として、唐代の詩人が用いている古い語である。『忠臣蔵演義』には、次に挙げるようにすべての用例が見られる。なお、()内の日本語訳は、原文の『仮名手本忠臣蔵』ではなく、筆者がそれぞれの中国語（唐話）から直訳したものである。

1. 「把」を動詞として用いる例

把藥劑來與你服藥。(薬をとって来て、あなたに飲ませよう。)

2. 「把」を手段を導く介詞として用いる例

勘平就勢把雙手扭他的兩手。(勘平は勢いに任せて両手で彼の両手をつかんだ。)

3. 「把」を処置を導く介詞として用いる例

高野侯道。這不該之論。若教新田算做清和源氏之流。把他戴過的頭盔要做尊敬。今麾下大小諸侯。清和源氏有許多。拜納之命。不當穩便。(高野侯は言いました。「これは間違った見解というものでありましょう。かりに、新田を清和源氏の流れをくむものとして、かぶっていた兜を敬わねばならぬというならば、今天下の諸侯は大小を問わず、清和源氏が数多おります。拜納のご命令は、穏やかではございません。)

1と2に関しては、以下のように『海外奇談』でも同じく「把」を用いている。

1. 「把」を「取る」という意味の動詞として用いる例

把藥劑來與你服。(薬をとって来て、あなたに飲ませよう。)

2. 「把」を手段を導く介詞として用いる例

勘平就勢把雙手扭二卒の手。(勘平は勢いに任せて両手で二人の手をつかんだ。)

『海外奇談』を見ると、1と2の「把」にはある共通点がある。それは、「把」の左下に小さくカタカナで振られている「テ」という送り仮名である。直訳すると、「把雙手」は「両手で」となるが、送り仮名として示された「テ」に基づいて訳すと、「両手でもって」とすべきだろう。

ところで、以下のように「把」の左下には必ず「テ」が振られているというわけではない。

把那長帽切做兩半。(烏帽子を真っ二つに切った。)

これは、人を烏帽子をかぶった頭から縦にまっすぐ切りつける場面を描いた一文である。この一文は、中国語(唐話)から見ても、描かれている場面の状況から見ても、「把」を処置を導く介詞として用いていると理解すべきだろう。『海外奇談』が出版される60年以上前に出版された陶山冕著『忠義水滸傳解』は「把你」を挙げ、「把捉將ノ三字大様同ジ気味ニテ何何ヲト云テニヲハ辞ナリ」と説明があり、「把」の処置を導く介詞用法を知ろうと思えば知ることができた³⁾。『海外奇談』が出版された文化15年(1815年)以降であれば、『海外奇談』の翻訳者が処置を導く介詞用法の「把」についての知識があった可能性は十分にある。ただし、当時の「把」に対する日本人の理解は、「把」は介詞であるという現代中国語に対する日本人中国語学習者の理解とは異なり、「把」が「トル」として用いられているのか、「～ヲ」として用いられているのか、をいちいち見極める必要があると考えていたのではないだろうか。

おそらく、『海外奇談』では動詞として用いられている「把」と「～でもって」という意味で用いられている「把」には「テ」という送り仮名を振り、処置を導く完全な介詞つまり陶山冕の言う「テニヲハ辞」であると見なされる「把」には送り仮名を振らなかったのではないだろうか⁴⁾。ここには、ひとつひとつの語を表記が同じであるとないとにかかわらず細かく理解しようとした翻訳態度を見てとることができる。また、このような態度は、「把」という語に対して意識的であったことの現われであるといえるだろう。

ただし、『忠臣蔵演義』の「把」は、『海外奇談』では別の語に置き換えられたり削除されたり

3) 凡例には「一 如那・這・了・着・把・將・什麼・恁地・等數言初回既已詳譯之故逐回不贅覽者須記得初回」と特記されている。「把」の処置の介詞としての用法は、白話小説を読むための基本語彙のように見なされていたのではないだろうか。

4) 送り仮名の「テ」の存在さえ気にしなければ、『海外奇談』の「把這話巴算做陰司的盤纏。趕上岳父黃泉之途陪走。就拽刀。將要擱開去。」は、『忠臣蔵演義』の「把這話柄算做陰司的盤纏。從後趕上丈人黃泉之途陪走。就把擱去的刀。將要擱開去。」の「把」をそのまま用いており、処置を導く「把」であると見做しうる。

している場合が多い。先に挙げた3は、以下のように『海外奇談』では「把」を「納」に書き換えている。

高執政道。這不該的尊旨。若教義貞算做清和源氏之流。納他戴過的頭盔要做尊敬。今麾下大小守令。清和源氏的有許多。拜納的命。不當穩便。(高執政は言いました。「これは間違ったご見解というものでありましょう。かりに、義貞を清和源氏の流れをくむものとして、かぶっていた兜を納め敬わなければならぬというならば、今天下の大名は大小を問わず、清和源氏が数多おります。拜納のご命令は、穩やかではございません。)

これは、敵将新田義貞が戦死したときにかぶっていた兜を、清和源氏の末裔が身につけた兜として敬意をはらい大事に保管すべきか否かを論じている場面の科白である。『忠臣蔵演義』では、「把」を用いており、直訳すると「かぶっていた兜を敬う」と日本語訳することができるだろう。『海外奇談』は、直訳すれば「かぶっていた兜を納め敬う」となる。また、次の例は、削除された箇所である。

那文匣也已經交過主公。(あの手紙もすでに主人にお渡しした。)

你殺死岳父。搶奪了的金子。(お前が義父を殺し、奪った金子だ。)

それぞれ『忠臣蔵演義』では、「把那文匣也已經交過主公。」と「你把老翁殺死。搶奪了的金子。」であり、処置を導く介詞の「把」が用いられているが、「把」がなくても中国語として成立している。

このように、『海外奇談』の「把」は、『忠臣蔵演義』と比較してみると、より意識的に用いられているといえるだろう。ここに、『忠臣蔵演義』を翻訳した、中国語(唐話)で中国人を相手に通訳や貿易の仕事をしていた周文次右衛門とは異なる『海外奇談』の翻訳者像が浮かんでくる。つまり、周文次右衛門のように幼いころから唐通事として、母語のように中国語(唐話)を習得することを目指したのではなく、中国に興味を持ち外国語として中国語(唐話)を学んだ日本人知識人が浮かんでくる。そして、「把」に対する細やかな認識は、日本人知識人としての漢文の知識が影響しているのではないだろうか。『海外奇談』の中国語(唐話)は、現代の中国語学者によって長い間中国語(唐話)の知識が乏しい日本人による誤りの多い中国語(唐話)であると見做されてきたが、「把」に対する配慮を見ると、唐話の知識を十分にではないかもしれないが持っていたということ、また、『忠臣蔵演義』を読み解いて『海外奇談』に仕立て上げるだけの言語力のあった人物だという推測が成り立つのではないだろうか。

4. 『海外奇談』の翻訳の特徴

前章では、『海外奇談』の翻訳者が日本人であり、中国語(唐話)に対する知識も有していた

のではないかと推測した。本章では、『忠臣蔵演義』からの書き換えを見ていきたい。上段に『忠臣蔵演義』、下段に『海外奇談』からの引用を挙げる。

(1) 中国人に仮託するための書き換え

這一本所説的。有一位諸侯。爲一件鬥毆上特特送了性命。(この本が物語るのは、ある諸侯が一度の暴力のためだけに命を落としたお話である。)

這一本所説的。海東國有一位判官。爲一件做鬥毆出來特特送了性命。(この本が物語るのは、海東の国のある判官が一度暴力を働いたことによって命を落としたお話である。)

『海外奇談』では、中国人から見て海の東にある国、日本の物語だということを示す「海東国」という語を付け加えることによって、中国人が訳した作品であり、読者も中国人が想定されていることを示している。『忠臣蔵演義』には、中国人が中国人に向けて訳したことを示す記述は一切見られず、原文の『仮名手本忠臣蔵』にも当然のことながら、そのような記述はない⁵⁾。

『海外奇談』には、中国人の手による翻訳作品なのだということを示す部分があるいっぽうで、『忠臣蔵演義』より『仮名手本忠臣蔵』に忠実な部分がある。

(2) 原文に忠実であるための書き換えあるいは書き足し

『忠臣蔵演義』では訳されていない、あるいは訳し方が不十分な部分を、『海外奇談』では訳し直している。まず原文を挙げ、上段に『忠臣蔵演義』、下段に『海外奇談』の該当部分を示す。

顔に似合ぬ様参る武藏鎧と書たるを。見るよりはっと思へども。

甲活欲奶奶看了是個情書。

甲活欲看了不是兼好討詩的書。明明寫題武藏鎧子。卻是師直手澤的情書。

師直が口一つで五器提げふもしれぬあぶない身代。それでも武士と思ふじゃ迄と。

下官従三寸舌中。教你敗壞了家當。也不見得。

全由下官三寸舌上。教你敗壞了家當。也不見得。恁地也你算做武夫麼。

5) 『忠臣蔵演義』には、唐通事が日本人としての立場から中国人に向けて、原文に見られる日本独特の文化に説明を加えた部分があるが、『海外奇談』では、中国人が中国人に日本文化を紹介する形に書き換えられている。注1)に挙げた拙論で、詳しく取り上げた。

ここに挙げた2例は、『忠臣蔵演義』では非常に簡潔に訳されているが、『海外奇談』では『忠臣蔵演義』で訳されなかった部分を訳し出している。ひとつめに挙げた「武蔵鎧」は固有名詞であり、日本の文芸に対する知識があり、『仮名手本忠臣蔵』を良く知る人物でなければ、理解できない語であるといえるだろう。

『忠臣蔵演義』ではまったく触れられていない部分を訳しているということからは、『仮名手本忠臣蔵』に精通している人物か、傍らに『仮名手本忠臣蔵』を置いて見ながら訳すことが可能であった人物の姿が思い浮かぶのではないだろうか。

(3) 誤訳の訂正

御存のごとく我等哥道に心を寄せ。吉田の兼好を師範と頼み日々の状通。其元へ届くれよと問合せの此書状。いかにもとのお返事は。口上でも苦しくないと。

你也得知。我只推請教歌詩。教他吉田兼好拜做師父。天天把情書托他轉交夫人。就把情書教夫人看看。乞賜佳音。立候回話。

奶奶也得知。我往常好歌詩。拜他吉田兼好做師父。天天通音信。他就把討詩書轉央我。教夫人看看。乞賜佳音。立候回話。

これは、高野師直が塩冶判官の夫人である顔世に言い寄っている場面である。原文では、和歌の師匠である吉田兼好が、歌を添削してほしいと夫人宛にしたための手紙を、高野侯に託した、とされているが、『忠臣蔵演義』では、高野侯が吉田兼好に顔世夫人への手紙を託したと誤訳している。『海外奇談』の「他就把討詩書轉央我」の「他」は吉田兼好を指しており、原文と同じ意味となるように訳しなおされており、正しい訳であると言えるだろう。

(4) より白話小説らしくするための書き換え

さるによって近比左少の至に候へども。右御礼の爲一家中よりの送り物。お受遊ばされ下さらば。生前の面目一入願奉る。

因為衆家臣奉上禮物。雖是輕微。只表孝順之心。望乞笑留是萬幸也。

為此上衆家臣奉上區區禮物。便是一蜆殼的微物。只表孝順之心。望乞笑留是萬幸。

「區區」「一蜆殼」は、『小説字彙』に収録されている語である。白話小説に用いられている語を使用することによって、白話小説らしさを出したのだろう。

(1)～(4)で確認したように、『忠臣蔵演義』から『海外奇談』への書き換えには、翻訳者の原文に忠実であろうとする態度を読み取ることができるだろう。

5. おわりに

江戸時代に翻訳された『仮名手本忠臣蔵』の中国語（唐話）訳は、それぞれまったく違った様相を示している。『海外奇談』は、『忠臣蔵演義』を土台としているが、原文に忠実であろうとする翻訳者の態度がより顕著である。この忠実さは、『仮名手本忠臣蔵』を良く知る日本人読者を対象としているからこそなのである。というのも、『海外奇談』には訓点と送り仮名、さらには振り仮名が施されており、内容の面だけでなく、形式の面でも日本人読者を満足させる作品として仕上げられているからである。

たとえば、『忠臣蔵演義』の「就是推敬新田氏の遺盜。那敗殘軍兵要感仁德。不動干戈。」は、『海外奇談』では「就是推敬新田氏^的遺盜。要教那敗殘軍兵感仁德。不動干戈。」のように、「要」と「教」が加えられている。この二語が加えられたことによって、「就是推敬新田氏の遺盜。」と「要教那敗殘軍兵感仁德。不動干戈。」の前後のつながりが明確になり、分かりやすくなっているといえるだろう。つまり、助動詞の「要」と使役の「教」を用いることによって、「新田氏の遺した兜を敬うことによって、敗殘兵に仁德を感じさせ、戦争をやめさせなくてはならない。」のように、日本語として解し易くする効果があるのではないだろうか。また、『忠臣蔵演義』の「若要將就揀去拜納。後來若不是真的。惹出人笑。」を『海外奇談』では「將就些揀去拜納。後來倘有不是真的。惹出人笑。」と、最初にあった「若要」を取り除いている。文頭の仮定の「若要」を取ったことによって、「いい加減に拝納して、後でもし本当でないとなったら、笑い者となってしまう。」という、簡潔で分かりやすい読解が可能となる。文頭の「若要」があることによって、「もしいい加減に拝納して、後でもし本当でないとなったら」と、「もし」が重複した日本語訳になることを避けたのではないだろうか。当時の日本の知識人は、白話小説や、白話を多用した文を読む時にも、訓読の方法を用いたのであり、ここで取り上げた2例は、訓読しやすくするためのものでもあったのではないだろうか。

一般の日本人にとっては、白話小説を読むことは困難な作業であった。しかし、白話小説を読みたいという日本人は少なからず存在していたのだろう。『海外奇談』は、訓点を施されたことによって、白話小説を原文で読んでみたい日本人の要求を広く満たした貴重な作品として位置付けることができるだろう。